

タイトル名「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第40回：第4章-その12-

対人援助を実践する動機の根底

著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

打ち止め？

「対人援助実践をリポートするこの一冊」の連載が始まって1年以上、ついにこの時が訪れた。

「やばい…ネタ切れだ…」。

本企画は自身の対人援助実践をリポートするきっかけとなったマンガを紹介することが主旨だったが、ついに私が紹介できる書籍を紹介し切ってしまったのだ。

「渡辺先生にどうやって言い訳をしようか…」そんなことを考えていた初夏、ある漫画のことを突然、しかし鮮烈に想起したのだった。その漫画とは…「キン肉マン」。

死にまつわる原体験

「キン肉マン」とは、1979年より少年ジャンプで連載されていた大人気漫画である。当初はヒーローとしてのキン肉マンの活躍を描きつつも、途中からプロレス物へと路線変更。今やプロレス漫画の金字塔といった印象を持つ方も少なくないだろう。

なぜ、そんなエンタメ性満載な漫画を、この企画の執筆に行き詰まった時に鮮烈に想起したのか。それはこの漫画が、私にとっての「死にまつわる原体験」と深く結びついており、この原体験に端を発する死への恐怖から、逆説的に対人援助の道を選んでいる節があるからだ。これから、少し異様ではあるが、その原体験について触れていきたい。

「キン肉マン」には、ジェロニモというキャラクターが出てくる。彼はインディアンのチェロキー族出身という設定のキャラクターなのだが、1番の特徴は「人間である」ということだ。

「キン肉マン」に出てくるキャラクターの多くは、「超人」と言われる人間を超えた卓越

した能力を有する存在だ。そんな超人たちの中で、ジェロニモは人間であるにも関わらず、果敢に闘いへと挑んでいく。



しかし、そんな苛烈な戦いの中、ジェロニモは命を落とす（しかも2度）。

漫画の詳しい場面は覚えていないのに、その命を落とすシーンにだけ、強烈な恐怖心を抱いたことを、今でもはっきり覚えている。小学4年生の時だ。

ジェロニモが命を落とすシーン（厳密には霊体になるのだが…）、そのシーンを見た直後、「死」について強烈に意識するようになった。自分は死んだらどうなるんだろう？

死に対する誰しもが抱く素朴な疑問であると思うが、私がそれを考えた時に体験したのは、自分自身が意識もろともこの世から抹消される感覚、今ある当たり前の意識が消え去るという想像することでしかできない終わり。今の自分の意識はどうなってしまおうだろう、死後の世界は本当にあるのか、存在せず自分の意識が消え去るならどんな消え方をするのか。小学4年生だった私は意識が遠のき逃れられない虚無感に支配され、圧倒的な恐怖心が私の心を支配した。

「死にたくない…」。ただその一念を頭に浮かべながら、ただただ泣いて枕を濡らす日々が続いたことを、今でも覚えている。この死に対する恐怖心に、私は現在進行形で脱却できてはいない。今現在も、かつてほどではないにしろ、死に対する恐怖心が私のさまざまな判断をする上での根本に根付いている。「死にたくない。だからこそ、全力であらゆることをやり尽くそう」のような考えである。

ただ一方、そのような死に対する強烈な恐怖心とともに、私の心に強く残っていることが「自己犠牲」である。なぜか。

ジェロニモが命を落とした、いや自身の命を厭わずに戦った信義が、自己犠牲だったのだ。他の超人を助けるために、ジェロニモは自分の身を捧げて危険に臨み、そして死んだ。この一連の流れは幼い私に、死に対する強烈な恐怖と共に、自己犠牲に対する強烈な憧憬のような、ある種矛盾するような思いを抱かせた。

繰り返すが、私は今もなお、絶対に死にたくない。しかし、生物にとって死は回避できない。だからこそ、それにあがらうように、生に対して強く執着してきたと自負している。

そんな私が障害児福祉という、ある側面で自己犠牲が求められる仕事をし続けているのは、なぜか。まだ不十分な言語化ではあるが、死を恐れるからこそ、唯一死と等価な自己犠牲という行動をすることで、逆説的に死に対する恐怖に抗おうとしているのかもしれない。死を恐れて、自分を犠牲にする、ある意味で矛盾する2つの思いを止揚し、し続ける源泉たる「キン肉マン」は、私にとって、対人援助を現在進行形でリブートし続ける一冊なのかもしれないと思った、初夏の昼である。

—つづく—